



# ナガサキ ピース・タイムズ

発行者【PUBLISHER】  
日本非核宣言自治体協議会  
(にほんひかくせんげんじちたいきょうぎかい)  
〒852-8117 長崎市平野町7番8号  
長崎市 平和推進課内  
電話 095-844-9923 FAX:095-846-5170  
E-mail info@nucfreejapan.com  
ホームページ http://www.nucfreejapan.com

NAGASAKI PEACE TIMES

【非核協】おやこ記者新聞

## 今ここ長崎から、 わたしたちが紡ぐ令和の平和



2019(令和元)年の8月9日、長崎は被爆74年目の夏を迎えました。

元号が令和に改まった今年は「今ここ長崎から、わたしたちが紡ぐ令和の平和」をメインテーマに、全国各地から集まったおやこ記者9組18名が、長崎発の平和継承活動や取り組み取材しました。【編集部】



明子さんの日記について語るHOPEプロジェクト代表二口ともゑさん



広島在住被爆2世 明子さんのピアノを修復、調律した坂井原浩さん

### 明子さんのピアノに出会って —受け継ぐことの大切さ—

私は、崔善愛×斎藤とも子船上コンサートに行き、被爆ピアノの持ち主の二口ともゑさんと調律師の坂井原浩さんに話を聞きました。ピアノは、河本明子さんが広島自分の家で19歳まで愛用していたもので、明子さんのピアノへの思いや、その音色を一人でも多くの人に届けたいそうです。原爆投下から74年経ち、被爆者が自らの体験を直接伝えられなくなっていく中で、次の世代の人にピアノをとおして平和を伝える。そして、若い人



広島原爆で19歳で亡くなった河本明子さんが愛用していた被爆ピアノ



純心女子高等学校の生徒が「千羽鶴」などを合唱。演奏は崔善愛さん

はどう受け継いでいくのかを考えてほしいそうです。私は、実際に明子さんのピアノを見たり、音色を聞いたり、明子さんの日記を見せてもらったりして、原爆のおそろしさを知り、ずっと平和でいてほしいと思いました。

「松本 万弥・弘次記者」



原爆によってできた傷跡。今でも爆風で割れた無数のガラスの破片が刺さったまま(写真右)



ナガサキ・ユース代表团  
7期生の厚田梨帆さんに話を聞きました。厚田さんは福岡出身で大学進学で長崎に来ました。大学1年生のときにPeace Caravan隊に所属。理由は長崎でしかできないことをしてみたいという思いからでした。



厚田梨帆さん

## 人類みなヒバクシャという意識を継承する

### —若いわたしにできること—

厚田さんは大学2年生のときにナガサキ・ユース代表团に任命されました。ニューヨークで行われたNPT(核不拡散条約)再検討会議第3回準備委員会に参加し、国連で発表する場がありました。内容は「人類みなヒバクシャという意識を継承する」というテーマでした。

戦争による唯一の被爆国である日本の平和を継承していくにはどうすればよいのか。厚田さんの話を聞いて、みんなが「自分にできることは何かを考え続けること」が、その答えであり、平和な未来への第一歩になると思いました。

【小野さくら・和美記者】

ぼくは、長崎工業高校の美術部のみなさんに話を聞きました。今、被爆地の長崎と広島では、被爆者の高齢化で、原爆のことを継承していくことが難しくなっています。

長崎工業高校の美術部では、被爆者の方に話を聞いて、絵を描くことで戦争を知らない人に原爆のことを知ってもらう活動をしています。美術部のみなさんが、「絵を描く機会があったことで、自分から積極的に原爆と平和について考えることができた。受け身にならず意識して今、自分ができ

## 長崎工業の平和発信

### —証言者の思いを絵に—



長崎工業高校美術部のみなさん

ることを考えることが大切」と話されていました。ぼくは、友達と意見が違っても言い争いせず話し合いで物事を決めることが大切だと強く思いました。

【大田 桔平・さくら記者】

# 親子の絆で深めた平和への思い

ぼくは家族・交流証言者の田平由布子さんに話を聞きました。田平さんは、被爆者の吉田勲さんの被爆体験を受け継ぎ、次世代に語り継ぐ活動をしています。田平さんが被爆体験を聞き取り、講話の準備をしているときに、吉田さんは亡くなれました。吉田さんのご家族に話を聞いて、その内容をもとに講話をしているそうです。吉田さんが講話を聞いたなら「田平に託してよかった」と安心してもらえるような講話を心掛けています。

青少年ピースフォーラムに参加している高校生の柳友唯さんと齋藤美緒さんに話を聞きました。この事業は全国の小中高校生が長崎に集まり平和について学習を深める事業です。お二人の参加理由は、多くの人の目線から戦争や平和について考えたかったからです。

平和な世界をつくるために二人が心がけていることを聞きました。

柳さんは当たり前の生活ができる状態が平和だと考えるので、それを大切にしたいそうです。齋藤さんはみんなの考えを

## 平和を創る主体者たれ

### —田平由布子さんのメッセージ—

田平由布子さん



取材をされていて、田平さんから「あなたにとつての『平和』とは？それをどう実行するの？」と尋ねられ、友達と仲良くすることが平和だと答えました。そして、新しい友達をつくることもしていきたいと思っています。

【大田 桔平・さくら記者】

## みんなの思いを大切につなげたい

### —「青少年ピースフォーラム」に参加して—



神奈川県藤沢市から参加した齋藤美緒さん(左)と柳友唯さん(右)

大事にして分かち合うことが平和だと考えるので、相手と自分の意見をていねいにつなぐことを心がけているそうです。

私はお互いの意見を大切にしたい、違う意見を取り入れたり認め合ったりすることができると、戦争は起こらないと思います。

【小野さくら・和美記者】

「平和が地球に広がるように」と願いを込めるフランスのアビさん  
【横井 百菜・佳代記者】「8月9日を忘れぬように」とオーストラリアから来たウィルさん  
【吉田 琴音・友美子記者】「みんなが笑顔ですごせる世界へ!と願って菊池さん・中薦さん」  
【鎌田 乃歌・絃子記者】「I love平和Peace!!」と語る神奈川県の中学生 北島さん・鐘築さん  
【吉田 琴音・友美子記者】



# 令和が戦後であり 続けるための紡ぎ

—戦争は非人間的だ—

被爆体験を語り継いでいる、築城昭平さん(92)に話を聞きました。築城さんは、終戦時18歳で、戦時中は三菱兵器で魚雷のねじを寸法どおりに旋盤する毎日でした。原爆が投下されたときは、夜勤明けで、かぶっていた布団から出ていた左ひじに大やけどを負いました。また、築城さんの友達



築城昭平さん

が家の下敷きになり、火事に巻き込まれて亡くなったそうです。「戦争ほど苦しいものはない。」と当時の様子を話してくれました。

戦前好きだったおまんじゅうや、誕生会で作ってもらったカレーライスも戦争が始まると食べられなくなり、芋や大根の葉がごちそうに感じられ

たそうです。戦争により日常が奪われる悲しさや辛さを教えていただきました。令和が戦後であり続けられるよう、長崎で学んだ核兵器の恐ろしさを全世界の人に紡いでいきます。

【小池 なつ希・さや香記者】

## 遺品や写真が語るもの

—核のこわさと平和の願いを伝えるために—



大久保一哉館長

長崎原爆資料館・館長の久保一哉さんに話を聞きました。被爆者が年々減りつつある中、体験を後世に残すために努力していることは、被爆者の生の証言を収めたビデオや体験記を収集することです。他にも、被爆者の体験を引きついでいく方々の育成もしています。展示できない分の被爆者の遺品や写真はモニターで見られるようにし、見に来た人が



強い印象を受けるように時計を最初の展示物にするという工夫をしています。「平和への第一歩は友達をたくさん作ること」という館長さんの言葉が心に残りました。争いは戦争につながるの、私は友達と仲良くなるために積極的に話しかける努力をしていきたいと思います。

【横井 百菜・佳代記者】

# わたしたちにできることを見つけよう!

## 思いやりから生まれる平和

—山里小学校を訪ねて—



大学生のスタッフが案内してくれました

私はPeace Now! Nagasaki 2019のワールドワークショップに参加してきました。その中で一番心に残ったこ

とは山里小学校にある「あの子らの丘」での一つだけの約束事です。それは「あの子らの丘では

虫を殺してはいけない」ということ。なぜなら虫はそこで亡くなった子どもたちの遊び相手であるため、その子らがさびしい想いをしないように、という願いがあるそうです。

それを聞いて、人のことを思いやって、小さな生き物も大切にすること、そこからもう平和をつくっているんだなと思いました。これから自分のことだけではなく人のことも考えて行動したいです。

【鎌田 乃歌・絃子記者】

## 永井隆博士の平和への思い

—如己愛人—



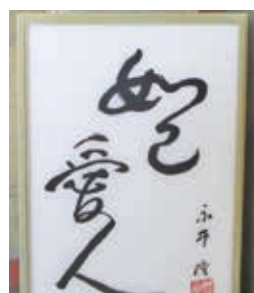
永井徳三郎館長(上)  
如己堂(下)

私は、長崎市上野町にある永井隆記念館の館長・永井徳三郎さんに話を聞きました。館長の祖父である永井隆博士は白血病を患い、そのうえ原爆で被爆しながらも、け

が人の救護を優先しました。自分がもし病気で、なおかつ、けがをしてどうして他人のことを助けられるのか、私は話を聞いてとても不思議に思いま

した。永井隆博士が大事にしていた想い「如己愛人」(おのれのごとくひとをあいせよ)その気持ちこそが平和をもたらすのだと気付かされました。館長さんが話してくれたことから平和が生まれるのだと思います。まずは、身近な人から大切に過ごしていきたいです。

【鎌田 乃歌・絃子記者】



永井博士直筆のパネル



千葉県我孫子市から「核兵器のない平和な世界を」と願う中学生  
【花城 琉聖・理恵記者】



永遠に笑顔でいられる世界を願って。千葉県の岩田さん  
【松本 万弥・弘次記者】



「戦争のない平和」と語る福岡県の宮田親子・青木親子  
【杉本 晴・茉由記者】



「核兵器禁止」を願うピースポート共同代表の川崎哲さん  
【大田 桔平・さくら記者】



神奈川県から安心して暮らせる世界を願う林田親子  
【小野 さくら・和美記者】



## アフリカから平和を願う メッセージ —わたしたちができることは何か—

ナイジェリア連邦共和国のモハンメド・ガナ・イサ大使に平和について、話を聞きました。被爆74周年の平和祈念式典に参列した理由は、「神様がくださった命を戦争や原



ナイジェリアのイサ大使

爆でなくすることは心が痛むので、平和な世界になつてほしい」と考えたからだそうです。現在核兵器を持っている国々が核兵器を手放せば、どの国も核兵器を必要としなくなる、と話してくれました。

## 平和大行進 紡ぐ長崎 平和のバトン

—対話と和解が  
平和へ導く—



2005年（被爆60年目）から3年に一度行われている「平和大行進」を主催している、鎮西学院高校3年生の小金丸和佳さん（がねまるわかと）に平和への思いを聞きました。「平和大行進」は、原爆で1400名以上の犠牲者が出た旧鎮西学院（爆心地から500メートル）から諫早市の鎮西学院まで約30キロメートルを、14区間のリレー方式で約1500名が平和の願いとともにバトンを

つなぐ行進です。小金丸さんは初めて参加したとき、まわりの人々に「暑いね」「がんばってね」と優しい声をかけられ、応援され、がんばろうと思つたそうです。

「戦争や核をなくすためには対話して和解につなげることが大切。平和を学び広げていきたい」と力強く話してくれました。

私は小金丸さんの話から、戦争をなくすためにいろいろな取り組みをして、旭川でも手記の朗読や「平和の灯」などを行い、戦争を知らない人々に「戦争は悲しいことだよ」と伝えていきたいです。

【小池なつ希・さや香記者】



被爆者による合唱で式典は始まりました

8月9日に行われた長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加しました。式典には66か国の代表が集まり、11時2分に黙とうをささげました。平和への誓いを述べた被爆者代表山脇佳朗（やまわきよしろう）さんは、11歳のときに被爆し、今も後遺症に悩まされています。山脇さんは全世界に向けて「この世界から核兵器を廃絶し、長崎を最後の被爆地とするためにみなさんの力を貸してください」と訴えています。

戦争が起きないように、原爆のおそろしさや、田上長崎市長が言った「国を超えて人と人との間に信頼関係をつくり続ける大切さ」を発信していきたいです。

私は、Peace Pieceプロジェクトの倉富美優（くらとみみゆう）さんと天水鈴乃音（あみずすのね）さんに話を聞きました。2人はWeeに動画を投稿することで、平和の発信をして

## 平和のためにできること —スマホ世代にも伝えたい—



天水鈴乃音さん（左）と倉富美優さん（右）

います。長崎特有の「尾曲がり猫」をモチーフにした「まがにゃん」というキャラクターを使って、実際に自分が参加している気分になれる動画です。より身近に平和を考えてほしいとの思いが込められているそうです。

平和のためにできることは、パズルのピースのように、人それぞれたくさんあると話してくれました。また、「知らないこと」が間違つた選択につながるとい話が心に残りました。私は、もつと平和について学んできたいと思います。

1994（平成6）年から始まった「平和の灯」。毎年約3500個のキャンドルが飾られ、温かみのある光が平和公園を包み込みます。



鬼永武さん

実行委員会会長の鬼永武（きなが）さん（71）は、「子どもたちが参加できるイベントを作りたい」と始めたきっかけを語ってくれました。キャンドルはすべて手作りで、平和学習の中に取り入れられています。子どもたちにとつて、誰でも平等にできる楽しい時間になっているそうです。一人ひとりが思いを込めたキャンドルに同じものは一つもありませんが、約8割のキャンドルには「平和」の文字が書かれています。長崎の子どもたちにとつて平和を願うことが日常になっていることを知り、私も全国でもこういった活動が当たり前になつてほしいと思いました。

【吉田琴音・友美子記者】



平和の思いが込められたキャンドル

## 長崎を最後の被爆地とするために

—平和祈念式典に参加して—



## 祈りの光を多くの方へ

―長崎のために動く  
団体の新たな試み―

令和元年8月8日、平和公園で新たな取り組みが催されました。サーチライトで500メートルの高さまで柱のよう

に光を照らす「祈りの光」です。長崎をより良くしたいという活動する長崎商工会議所の水野和美さん(42)に話を聞きました。

「祈りの光」は、長崎をより良くしたいという活動する長崎商工会議所の水野和美さん(42)に話を聞きました。



水野和美さん



初めて灯された祈りの光

## 未来へ続け！ 後世へのバトン渡し

ぼくは「ピースバトン・ナガサキ」の調仁美代表に話を聞きました。

「ピースバトン・ナガサキ」は、これからの時代を担う若い人たちに戦争や原爆について知ってもらい、平和への思いを受け継ぎ、バトンを渡すことができるように、との想いを持って活動して



―子どもたちに伝えたい大切なこと―



戦時中の服を着てみました

の稲佐山の住民の意見に他の市民の賛成もあり、2年の歳月をかけ、実現しました。広範囲で見ることができ、多くの方が平和を感じられるように考えられました。

多くの人が遠くからでも平和を感じられるのはとても良いことだと思います。これからもずっとこの行事を続けてほしいです。

【吉田 琴音・友美子記者】

## アートにこめた 井川さんの願い ―折り鶴で平和パフォーマンス―

8月9日の長崎原爆の日、長崎平和公園にある「長崎最後の被爆地とする誓いの火」の下で行き交う人々に折り鶴を折ってもらい、コメントに貼り付ける「折り鶴パフォーマンス」をしている井川惺亮さんから話を聞きました。



飾り付けられた折り鶴

した。井川さんはこのコメントをデザインした方です。原爆の日にはパフォーマンスを始めたきっかけは、その日に折り鶴を折るとみんなが「平和だなあ」と感じるからだそうです。コメントの色には原色が使われています。井川さんは「色は人と人を結びつける力があります」と言っていました。誓いの火の灯台台には今でも毎月9日の11時ご



話を聞いた井川さんらメンバー

## 希望の木 ―被爆クスノキ―

に伝えていくことの大切さを改めて感じました。ぼくも戦争や原爆、平和についてしっかり学び、世界中のたくさんの人々に伝えていけるよう努力していきます。

【杉本 晴・茉由記者】



被爆クスノキ



久保田健一さん

6年ぶりに  
おやこ記者との  
再会



北畑希実さん

山王神社にある被爆クスノキのお世話をしている樹木医・久保田健一さんから話を聞きました。普段は天然記念物の木や、老木・巨木を診断、治療しています。山王神社の境内の入り口には樹齢5、600年の大きなクスノキが2本立っています。福山雅治さんの歌の

モデルとなった木です。爆心地から800メートル、爆風と熱線により上半分が焼けこげ、枯れ木のようにになりましたが、2か月後には新芽を出し、現在は治療を受けながら元気に育っています。シロアリや菌から保護しながら、近年は周囲の環境に沿うよう丁寧に伐採し、

現在の大きさを保つ努力をされています。幕末の坂本龍馬も見たクスノキは、長崎の復興の力となり、今も私たちを見守っているのです。原爆の被害にも負えなかったクスノキに込められた祈りを伝えたいと思いました。

【横井 百菜・佳代記者】



6年前の北畑理恵・希実記者

「高校生平和大使」の皆さんは、8月17日から国連欧州本部などを訪問し、核兵器廃絶と世界平和を願う市民の声を世界に届けます。

【編集部】



# 広島・長崎原爆投下と終戦から 74年目、令和元年の夏。 私たちのふるさとで調べ、 学び、考えた“戦争”と“平和”



全国9組18名のおやこ記者がそれぞれ住む地域の取材をしました。

2019（令和元）年の夏。1945（昭和20）年8月9日の原爆投下から、長崎は74年目を迎えました。今年の日本非核宣言自治体協議会（非核協）主催の親子記者事業には、全国から188組の応募があり、抽選で選ばれた9組18名が参加することになりました。

おやこ記者のみなさんは、長崎での取材に先がけて、それぞれの地域で「平和」について考える事前取材を行いました。今回は次の4つのテーマからひとつを選択し、記事にまとめています。

- 1）戦争を体験した方に話を聞いて考えたこと
- 2）あなたの住む地域にある平和資料館等の施設を訪ねて学んだこと
- 3）あなたの住む地域の平和イベントに参加したり、地域で平和を伝える活動をしている人に会ったりして学んだこと
- 4）家族で考えた「平和」について

このコーナーでは、おやこ記者のみなさんが生まれ育った地域で戦争の痕跡を調べ、令和元年にあらためて学び考えた平和についてのリポートをご紹介します（編集部）



東北代表

秋田県 秋田市

鎌田 乃歌・紘子 記者

私は、戦争を体験し、講演などで伝えている「土崎港被爆市民会議」の伊藤津紀子さんに話を聞きました。私の住んでいるすぐそば、土崎に空襲があったこと、B29が134機飛んできて1万2047発もの爆弾が落とされたこと、そしてそれが終戦前夜の1945年8月14日



空襲後、日本石油秋田製油所で唯一残った溶けたコンクリートの柱

## 太平洋戦争最後の空襲を受けた地、土崎



空襲の犠牲者を慰霊する「平和を祈る乙女の像」



伊藤津紀子さん

あつたことを初めて知りました。もう半日、終戦が早かったら、誰一人苦しんだり、亡くなったりすることとはなかったのに。そもそも戦争なんてなかったらと、戦争の恐ろしさを改めて感じました。これからの未来がずっと平和であってほしいと私は思います。

北海道代表

北海道 旭川市

小池 なつ希・さや香 記者

曾祖父の若柳愛吉が戦地で撮影した写真について、家族で調べてみました。23歳で満州へ戦争に行き、終戦後シベリアに抑留され30歳の時に日本に帰ってきました。理髪業だったので、戦地で偉い人の髪を切ったり、馬の手入れをしたりして普通は食糧をすることのないチョコレートや羊羹をもらい、生き延びることが出来ました。



曾祖父が撮影した写真



## 曾祖父の写真が伝える戦争



小池なつ希記者（左）

戦後、祖父の若柳彰一に「仲間がたくさん死んでとても悲しい思いをした、戦争は絶対にしてはいけない」と話していたそうです。私は戦地での写真を見て、罪のない人を苦しめる戦争は、絶対にしてはいけない、二度と戦争はしてはいけないと思いました。

中部代表

愛知県 半田市

横井 百菜・佳代 記者

私は曾祖母の横井俊子（95）から、中島飛行機半田製作所の話を聞きました。1年8か月だけ存在した滑走路のある大きな工場です。工員2万6千人のうち1万2千人が小学生（当時は国民学校）を含む学生です。私と同じくらいの子どもたちも「お国のため」と小さな手で飛行機を組み立てました。勉強も遊びも我慢してとても辛かったと思います。



横井敏子さん（左）

## 空爆と地震に襲われた町



機銃掃射跡の残る工場

昭和20年7月24日に半田空襲が起きました。B29や小型機が来襲し、工場や町に点在する寮や一般住宅までが爆撃を受けました。空襲前には東南海地震・三河地震もあり、終戦間近に大勢の人々が亡くなりました。私は過去にこれだけの悲惨な事があつたと初めて知りました。平和でいるために何をすべきか皆で考えるべきだと思いました。

関東代表

群馬県 高崎市

吉田 琴音・友美子 記者



私は、『ちいちゃんのかげおくり』、『大人になれなかった弟たちに』、『ひろしまのピカ』などのいろいろな本を読みました。その中の『おこりじどう』という本の最後に、のどがかわいていた女の子に、おじぎょうさんが水をあたえるところが

## 戦争に関する本を読んで

印象的でした。なぜなら、みんな水を飲めずに死んでしまった中で、女の子も死んでしまったけれど、最後に水が飲めたのでよかったと思ったからです。二度と、戦争や原爆を起さないためには、世界中の人々に、戦争や原爆のおそろしさを伝えていくことが必要だと思います。私も、今回たくさん本を読んで、知らなかった戦争のことを学びました。



吉田琴音記者



近畿代表

大阪府 八尾市

おの 小野 さくら・和美 記者

私たちは、毎日楽しい生活を送っています。私の曾祖母の小野昇子に話を聞いて、戦争時代はそうではなかったことがわかりました。

私は、学校で勉強を楽しく学んでいます。でも、戦争時代は学校へ行くのがなかったそうです。今ではお店で欲しいものが手に入りますが、戦争時代はものを売っているお店も少なかったし、お腹いっぱい食べられませんでした。

曾祖母はこれから戦争をしてほしくないし、あんなに苦しい思いをしてほしくないそうです。

## 戦争を体験した曾祖母に話を聞いて

この話を聞いて、私はどんなことがあっても戦争はしてはいけないと思いました。そのためには、ふだんから助け合える世の中だと思ひました。



小野さくら記者(左)と小野昇子さん(右)

四国代表

高知県 高知市

すぎもと はる まゆ 杉本 晴・茉由 記者



高知空襲後の写真を見ながら説明を受ける様子

ぼくは、戦争時の高知の様子を学ぶために、高知市にある「平和資料館」へ行き、館長の岡村正弘さんに話を聞きました。

高知空襲は昭和20年7月4日午前2時頃におきました。B29が125機ほど来て、M69という爆弾を18万個も投下していました。

## 戦争こそこの世の終わり

その後、焼夷弾を見せられて、その大きさと重さに驚き、これが空から落ちてくると考えると本当に怖かったです。

ぼくはこの話を聞いて戦争の恐ろしさを改めて感じ、戦争こそこの世の終わりだと思いました。



岡村館長に話を聞く様子

中国代表

広島県 東広島市

おおた きつぺい 大田 桔平・さくら 記者



ぼく(桔平)と母(さくら)

ぼくは、広島県で生まれて東広島市に住んでいます。東広島市は、戦時中は大きな被害にあうこともなかったと聞きます。ぼくが平和について考え始めたきっかけは、小学校3年生の時に家族で被爆電車に乗る機会があり、その事前学習として被爆者でもある漫画家の中沢啓治さんの作品をたくさん読み込んだこと

## 自分のできる平和とは

「戦争を起こさないために、周囲の色んな人たちと仲良くすること。一人ひとりがそういう思いを持つこと」それが平和につながると思います。皆さんも「自分のできる平和とは何か」を共に考えませんか……。



東広島市原爆資料展示室

沖縄代表

沖縄県 石垣市

はなしろりゅうせい り え 花城 琉聖・理恵 記者



玉城功一さん(左)

「八重山戦争マラリアを語り継ぐ会」の会長・玉城功一さんに話を聞きました。

「戦争マラリア」の原因は、石垣島に日本軍の飛行場を三つ建設し、軍の作戦によって住民たちが悪性マラリアの有病地域である石垣島と西表島の山の方へ強制移住を余儀なくされたことだと知

## もうひとつの沖縄戦

島に飛行場が三つあったことに驚きました。

戦後もマラリアの高熱で苦しむ人たちがいましたが、米軍からアテブリンと言う薬をもらい命拾った人もいました。今でも不発弾が土の中にくさん残っています。

ぼくは未来の子どもたちに平和と戦争のことを伝えたいと思います。



機銃掃射跡の残る元海底電線陸揚室

九州代表

大分県 別府市

まつもと まみ こうじ 松本 万弥・弘次 記者



回天神社

私は、大分県日出町にある回天神社と回天大神訓練基地跡を訪れました。ここには、人間魚雷「回天」の実物大模型があります。

回天は、魚雷(長さ約15メートル)の中央部に操縦室を取り付けて、人間が乗り込めるようにした特攻兵器で、先端に約1.5トンの炸薬を搭載して、敵艦に体当たりするそうです。回天の搭乗者は、

## 人間魚雷「回天」で学んだ、命の尊さ



回天の実物大模型

ひとつしかない自分の命を捨てることで、大切な祖国と愛する人々を守ろうとしたそうです。

私は、かけがえのない命が失われる戦争は、もう二度とあってはいけな



編集  
後記



事務局だより

取材に行き、原稿用紙に記事を書き、編集者・デザイナーなど皆さんのスタッフが力を合わせて新聞にまとめる。SNSで全世界に、一瞬で情報を発信できる時代になりましたが、多くの人の手で「想い」を紡いで、親子記者事業は12年目を迎えました。

おやこ記者として参加した方はもちろん、この新聞を手にとっていただいた方々、この事業をおして広げた平和の種が、皆さんの心の中で大きく育っていきば幸いです。

濱田 興樹

北海道  
旭川市

小池 なつ希・さや香 記者

優しい心が  
平和をつくる

2年前、長男生吹とおやこ記者に参加した際、帰りに雨に降られて困っていた私を駅まで送り届けてくれた方に、平和の灯の会場で再会しました。今年、なつ希もおやこ記者に参加して、多くの出会



いに恵まれました。長崎での出会いや優しさに感謝いたします。人の痛みがわかる優しさがあれば、世界は平和になると思います。

秋田県  
秋田市

鎌田 乃歌・紘子 記者

当たり前の  
生活を大切に

私は、今回長崎でおやこ記者をするまでは、「平和」は自分ではつくれないほど遠いものだと思っていました。けれど、記者として取材をしてみたら、平和は、人のことを思いやる、他人を自分と同じくらい愛する、と



いうことでもうまれると分かりました。当たり前の生活、家族や友人を大切にしていきたいです。

群馬県  
高崎市

吉田 琴音・友美子 記者

被爆者の  
強い想い

平和祈念式典での被爆者の方による合唱は想いや願いが伝わる歌



でした。原爆は全てを奪う恐ろしいものです。戦争を繰り返してしまえば、また原爆が使われてつらい思いをする被爆者が出てしまいます。二度と戦争をしなために、原爆の恐ろしさと平和の大切さを知らない人たちに、長崎で学んだことを伝えていきたいです。

愛知県  
半田市

横井 百葉・佳代 記者

長崎と平和

この4日間 平和についてたくさんのお話を学びました。初めて知った被爆者の方の話、原爆資料館の館長さんの話、被爆者の思い、私が知ったことすべてを持ち帰って家族や友達に伝えたいです。

「百葉記者」  
被爆者の方々が、現在も苦しみがあっても平和を願い、核の恐ろしさ・つらさ・悲しさを訴え続ける

中に、人間の強さと優しさを感じました。宣言や誓いの一言一言には切なる思いが込められ重みがありました。私達もより多くの人にこの折りを伝えようと思います。  
「佳代記者」



大阪府  
八尾市

小野 さくら・和美 記者

おやこ記者を  
体験して考えたこと

私は平和祈念式典をはじめて目の前で見ました。テレビで見ると目の前で見るのはちがいました。現在被爆者の平均年齢は82歳をこえています。また戦争体験者も減っています。だから私たちの世



代でも、戦争について勉強をしないといけないと今回はじめて思いました。戦争は二度とあつてはならない事だと思いました。

広島県  
東広島市

大田 桔平・さくら 記者

伝える大切さ

長崎に来て平和について学び考えました。長崎工業高校と家族交流証言者の田平由布子さんの取材をし、一人でも多くの人に戦争の悲惨さを伝え、共感し、平和の輪を広げることができたらいなと思



いました。そのために、

高知県  
高知市

杉本 晴・茉由 記者

まずは  
できることから

原爆の被害や後遺症で苦しむ方の方の実際の声を聞かせていただき、胸を痛めることが多くありました。

同じ過ちを起こさないために戦争や原爆のおそろしさを次の世代へ伝え続け、核兵器



のない世界を目指して、自分たちのできることから始めていきたいと強く感じた4日間でした。

大分県  
別府市

松本 万弥・弘次 記者

伝えていきたい

私は、おやこ記者に参加して、いろいろなことを勉強して絶対に戦争をしないといけない



と思いました。「伝える人たちがいずれいなくなる」という言葉がとてもしに残り、もつと学んで受け継いでいきたいと思いました。まずは、今回経験したこと大分に帰って友達に伝えようと思います。



沖縄県  
石垣市

花城 琉聖・理恵 記者

初めての長崎取材を終えて

ばくはナイジェリアのイサ大使と折り鶴パフォーマンズの井川さんに取材をしました。最初は緊張したけど取材をしてみると落ち着いて話を聞くことができました。



親子記者事業に参加し自分の住んでいる石垣島の戦争体験者の話や長崎の

原爆の話聞いて、平和の大切さを改めて勉強できて良かったです。

学生ボランティア  
11名がおやこ記者と  
ともに取材!!



今年度も、長崎県立大学シーボルト校国際社会学科の金村ゼミ生11名に学生ボランティアとして、おやこ記者9組の取材と記事作成・編集をサポートしていただきました。

(写真上段右より)

♥ 「受け継ぐ時代」親子と共に多くの学びがありました。 前田 真里

♥ 長崎県内で育った私にも新たな学びがたくさんありました。 豊福 勇樹

♥ 長崎から平和の思いを伝え続ける大切さを学んだ。 松浦 直輝

♥ 世界平和は、国に問わず一人ひとりに責任があります。 趙 航

♥ 戦争を知らないからこそ、使命感を持ち続けたい。 山崎 優

♥ 平和のありがたみをかみしめて生きていこうと思った。 天水鈴乃音

(写真前列右より)

♥ 平和の維持の大変さ・大切さを学ぶことが出来ました。 與那城 慎

♥ みんなの積極的な姿勢から学ぶことがありました。 中野末紀子

♥ 貴重な機会を忘れず、平和を身近な事として考えたい。 長尾 瑞希

♥ 平和について考えようとする姿勢を大切にしたい。 倉富 美優

(写真前列左端(白枠))

♥ 私も親子との取材で多くのことを学びました。 松川 楓花